

の「濁流」の連作は鬼気迫るものがある。ひと目見て別れゆく孫のためよき名付けよと名を選びませり「暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた」二・二六事件のとき、齋藤史は小さい子供を抱えていた。父への思いを持ちながら、幼子を抱えて二・二六事件と対峙する齋藤史の姿が見えてくる。個人的には、「白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り」(「うたのゆくへ」)が齋藤史屈指の名歌と思う。この歌も二・二六事件とからめて読むむきもあるようだが、そう読まなくても十分読み込める歌である。

17 一ふさの葡萄手握り冷たさに今朝の心の救はれてある 佐佐木治綱

葡萄からは、佐佐木信綱の「幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ」(『思草』)が思い出される。直接つながりがあるわけではないが、葡萄への親しみが共通する。治綱は、葡萄の冷たい触感に心が救われる思いをうたう。感覚が良く伝わり、心が動かされる歌だ。

18 きしきしと降りゐる雪に歩み来て花舗にて黒い手袋をぬぐ 遠山光栄

白い雪、黒い手袋。モノクロームの冷たい世界に対して、花舗の明るい雰囲気なのか、一時的に白黒と決別する。雪は「きしきしと」降っているのだから、決してやさしくはない。厳しい冬の花舗でのほんのわずかなやすらぎであろう。歌集のなかでは、この歌に続いて「手袋のしたに手のいろごりみたり雪夜の花舗に菜の花えらぶ」しろき独活うどにさらしみるときの水にゆらぎて春がきたらむ」があり、三首の連作となっている。菜の花の黄色に彩られて帰路にいた作者が想像される。歌集『褐色の実』は植物が多く読まれた、彩りのある歌集である。

19 わが家まで駅より坂の無きことに夜更けけ拘り坂を踏みたし 佐佐木由幾

佐佐木定綱の当歌に対するコメント「人生の比喩として読むかは読み手の判断にゆだねられている」はまさしく読者の課題となるだろう。一読者としては、まず事実・実感としてとらえたうえで、人生にも関係してくると読んだが、いかがだろう。坂のある人生への拘りと言ってもいいのかもしれない。

20 鈴鹿川中洲の砂の逝く水に崩れるおとをひとり聴くなり 村田邦夫

自然の「音」を的確にとらえた短歌である。川を見ているのではあるが、視覚ではなく、聴覚に訴える短歌で、砂が崩れているさまは、音によつて認識されている。信綱の秘書として尽力した作者の鈴鹿での詠である。

今回、11から20を担当したが、齋藤史の『魚歌』の解説を前川佐美雄が書いていたり、齋藤史の父、齋藤瀏が富岡冬野『空は青し』に序文を寄せていたり、横のつながりを意識することが多かった。信綱の弟子ということも当然共通してくる。同じ結社の百人一首だからこそ、そのつながりを味わつて読むことができる。

本特集の掲載された九月号の黒岩剛仁の時評を読めば、客観的な視点を保ちながら冷静に選ばれていることがわかる。それでも、黒岩も書く通り、議論百出となるだろう。だが、それが議論のきっかけとなれば、心の花の歌人や、その代表的な歌を各人が考える、いい機会となるはずである。